

播隆さんと伊吹山

古代、日本の七高山のひとつに数えられ、たくさんの修験者が修行を行った伊吹山。

江戸時代の作仏聖・円空は、この山を拠点に全国で修行したことで知られています。円空から遅れること約百年、念仏僧・播隆も伊吹山中の草庵を拠点に笠ヶ岳や穗高岳で修行をし、文政11年(1828)、当時誰も登ったことがなかった槍ヶ岳山頂に仏像を安置して開山を果たします。播隆は、槍の穂先を阿弥陀如来の蓮華座と考え、誰もがここに登れるよう鉄の鎖「善の綱」を取り付けました。登山爱好者からは日本初のアルピニストと呼ばれています。

播隆は天明6年(1786)に越中国(富山県)に生まれました。伊吹山には文政3年(1820)に修行に入り、同6年から9年までは、伊吹山で行場を巡りながら山頂を目指す「伊吹山禅定」(禅定は高山で修行し悟りを開くこと)や、岩屋などで山籠修行を行っています。

伊吹山頂には弥勒堂が祀られ、伊吹禅定の修行者は、ここを目指して山中の手掛岩や行道岩、阿弥陀ヶ崩れなどの岩場や、倉ノ内の滝不動で厳しい修行を行ったといわれています。

なぜ播隆は山に登ったのでしょうか。仏の道を求める彼は、安泰をむさぼる当時の寺院仏教になじめ

ず、修行の場を山岳にもとめました。生家にこぎれている手紙には厳しく諸宗を批判しており、播隆の真摯な信仰心を読みとることができます。

播隆が生きた時代。江戸が経済・文化面で大変貌をとげた文化・文政期(1804~30)、富士山・立山・白山は三大靈場として庶民の間に広く知られ、各地には信徒による講が数多く組織されました。この時期に盛んになったこうした靈山登拝は、物見遊山や遊興という一面もありました。播隆の一代記によると、播隆を慕って伊吹山に登る信者が近江・美濃・尾張などから「市の如く、山の如し」の有様であったと書かれています。

米原市志賀谷には播隆書の「南無阿弥陀仏」名号軸が三本と、名号碑が二基あり信徒が多かったようです。市内には他に数幅あることから、播隆の足跡を追うことができます。

(高橋順之)



▲播隆六字名号

情報 BOX

◆米原市はNHK大河ドラマ『功名が辻』の舞台！

市内の主な史跡

- ・「千代生誕の地」：米原市飯若宮氏屋敷跡
説明看板、若宮氏顕彰碑の脇に、地元の手によってミニ資料館や土産屋が運営されています。
※レアな千代さまグッズあり。

- ・「法秀院寄寓の地」：米原市宇賀野長野家
一豊とその母法秀院が身を寄せたのが長野家です。ここで、千代は見出されました。
説明看板あり。普段は敷地内に入れません。

- ・「法秀院の墓」：米原市宇賀野
平成9年、顕彰会の手で墓域が整備されました。説明看板や休憩所・トイレ・駐車場があります。

- ・「田中孫作屋敷跡」：米原市高溝
功臣田中孫作の屋敷跡には、説明板や顔出し看板が置かれています。

◆『功名が辻』に合わせて、下記の書籍が発行されています。

- ・米原市大河ドラマ「功名が辻」実行委員会編
『一豊と千代そして法秀院』
- ・米原市高溝孫作会編
『山内一豊・千代の忠臣 田中孫作の里 高溝』

※問合せ先：米原市観光協会 ☎0749-58-2227

◆◆編集後記◆◆

佐加太と一緒に育ててきた担当も高齢化■2人が文化財所管課の管理職、1人は市民センター館長、一般職は1人という状態です■執筆陣も少なくなりました■でも、まだまだ知られていない「米原」を発信します(シャンギリチ子)

米原市文化財ニュース 佐加太 第24号

発行 平成18年10月20日
編集 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会スポーツ振興課
TEL.0749(55)8106
印刷 (株)シバタプロセス印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

京極氏の城と陣屋

京極氏は、宇多天皇の流れを汲む近江源氏佐々木氏が鎌倉時代に、京極氏、六角氏、大原氏、高島氏に分かれたうちの一派です。始祖氏信が愛知川以北の北近江と柏原(米原市清瀧)の館を与えられ、京都京極高辻に屋敷を構え「京極氏」を名乗ったのに始まります。

南北朝時代、「バサラ大名」と異名をとった五世高氏(尊誉)の活躍により、室町時代には幕府の軍事を担当する「四職家」として中央政権で重きをなしています。

応仁の乱以後は京極氏館(米原市上平寺)やその詰の城として上平寺城(米原市弥高・藤川)を整備し、北近江を本拠として戦国大名として歩み始めます。

しかし、跡目相続争いに、有力家臣の一派争いが加わり不安定な領地支配となります。永禄3年(1560)浅井長政が家督を相続すると、京極政権の姿は記録上から消えていきます。

その後、高吉の流れを汲む高次・高知兄弟によって再興されます。高次は、織田信長、豊臣秀吉に仕え、関ヶ原合戦の際に大津城に籠城し、合戦勝利の一因をなしたとして戦功を上げます。また、高知も信長、秀吉に仕え、関ヶ原合戦に参戦し手柄を立てます。

高次・高知兄弟の活躍により、江戸時代以降、四国丸亀藩(香川県丸亀市)をはじめ、多度津藩(香



▲丸亀城跡

第24号

2006年10月20日

滋賀県米原市教育委員会

川県)、宮津藩・峰山藩(京都府)、豊岡藩(兵庫県)の5つの大名家として繁栄します。

鎌倉時代からおよそ650年の永きにわたって、日本の歴史に名を残した京極氏。柏原宿歴史館では、その居城と陣屋を通して一族の栄枯盛衰の足跡を紹介する企画展「京極氏の城と陣屋展」が開催されました。

【大津城】

大津城は坂本城とその城下町を移して築城され、文禄4年(1595)、京極高次が八幡より6万石で入りました。

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の前哨戦とも言うべき「大津籠城戦」で、西軍に囲まれた高次は、天守のある本丸以外を焼失しながらもその猛攻に耐え、西軍1万8千を関ヶ原に参戦させなかつことにより、関ヶ原合戦勝利の一因をなしたとして、家康より論功を受けます。また、焼失を免れた天守は、めでたい「殿守」として彦根城に移築されます。

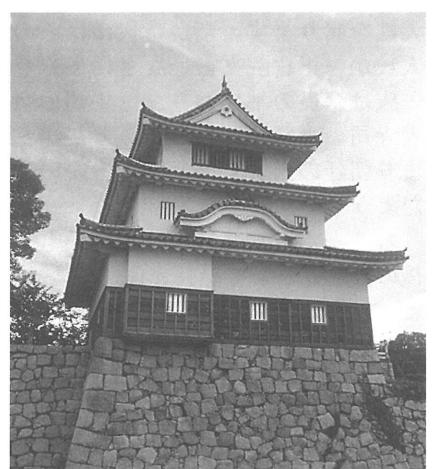
【丸亀城】

山崎家が断絶後、京極高和が6万石で入ります。三代高或の時、高道に多度津1万石を分け(多度津陣屋)、明治維新まで七代212年間続きました。

丸亀城は、街のほぼ中央の亀山にある平山城で、本丸、二の丸、三の丸を配し、三重の高石垣が取り巻きます。万治3年(1660)京極高和によって三重三階の天守が本丸北の石垣上に築造されました。これが現存する天守です。

石垣の曲線は「扇の勾配」と呼ばれ、天守との調和の美しさは名城の一つと言えます。

(桂田峰男)



▲丸亀城天守

米原市のまつり ④

米原市の奴振り

奴振りは様々な名称で全国各地に伝わっています。独特的の足運びと道具を投げ渡す勇壮な姿が見所といえます。米原市に伝わる奴振りを紹介します。

【滋賀県指定民俗文化財：奴振】（長沢の奴振り）

福田寺は天武天皇の勅願により創建されたと伝えられる古刹で、中世、浄土真宗に改宗し、真宗中興の祖である蓮如上人が在住したとも伝えられ、江戸時代には西本願寺の連枝地となり、長沢御坊と呼ばれています。幕末、彦根藩主で大老の井伊直弼の従兄弟であった住職摸専のもとに、摸政家の二条家より鑑子姫がお輿入れになりました。奴振りはそのお輿入れの行列の奴振りをならったといい、毎年、5月1日と、11月15日の報恩講の日に行われています。足の裏を見せずにすり足で歩く所に特徴があることから、公家奴振りと呼ばれています。

【宇賀野の奴振】

毎年4月29日の坂田神明宮の春祭りに行われます。坂田神明宮は、彦根藩井伊家の居城彦根城の鬼門に当たることから、第8代藩主の井伊直惟はその守りとして社殿を造営します。奴振りはその際の行列を記念したもので、大正6年に始められました。奴は

足を尻に届くくらい高く蹴り上げることから、蹴り奴とも呼ばれています。

【能登瀬の奴振】

能登瀬の奴振は善性寺奴とも言われ、毎年5月5日に行われます。善性寺は、山津照神社の神宮寺で、住職と近衛家や綾小路家など宮家との関係が深かつたことから、明治4年まで毎年御祈祷札を宮中へ献納していました。後にその際の道中奴が山津照神社へ奉納されるようになり、昭和40年代から春の大祭で奉納されるようになったようです。（桂田峰男）



▲長沢の奴振り

その後の息長氏(1)

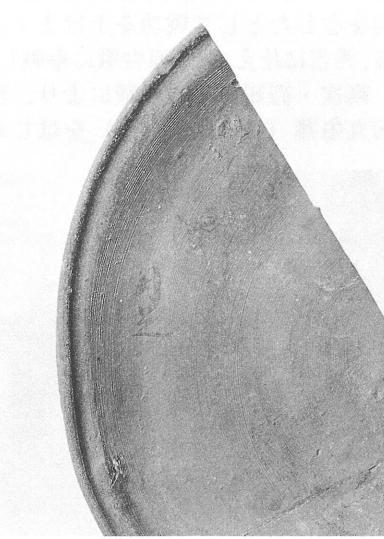
息長氏は繼体王朝を擁立した北近江の古代豪族として有名です。米原市域はこの息長氏の本貫地であり、県指定史跡山津照神社古墳や塚の越古墳などの前方後円墳をはじめ数多くの古墳が点在しています。天武朝になると息長氏は天武八姓の第一位である真人姓を賜ります。奈良時代にはその一族息長丹生真人氏が『正倉院文書』などに多く登場します。この一族は奈良の都におり、画工司の令史や画師、造東大寺司の画所領であったことが知られています。つまり朝廷の画師集団として寺院の造営に関わっていたようです。

むろん本貫地に残った息長氏もいました。その最後のひとりとして息長光保がいます。『權記』によると、長徳元年(995)に筑摩御厨長として、この息長光保が登場します。筑摩御厨は宮内省大膳職(後に内膳司)に所属する機関で、宮中へ御饗を貢進していました。『延喜内膳式』によると、この筑摩御厨からは鮒鮓(鮒ずし)、味塩鮒、醤鮓などを貢進していましたことが記されています。

ところで、筑摩の琵琶湖岸に位置する筑摩湖岸遺跡の発掘調査では8世紀から9世紀にかけての須恵器をはじめ「郡」

「月足」などの墨書き土器や、鉄製刀子、風字硯、綠釉碗、神功開宝などが出土しており、官衙的色彩が強く、この地が筑摩御厨であったと推定されています。

(中井 均)



▲筑摩御厨遺跡出土墨書き土器

【国史跡】

弥高寺跡発掘調査速報 一 奈良時代の土器片出土 一

山岳寺院・弥高寺の歴史

夏の2ヶ月間、市内弥高地区の山中、標高約740mのところにある弥高寺跡の発掘調査をおこないました。調査面積は約210m²で、今後の保存と活用のために、遺跡の残り具合と出土した土器などからその時代を確認することなどが目的です。

米原市には、伊吹山、そしてその南に對峙する靈仙山という、山岳信仰の靈場とされるふたつの名山があります。とくに伊吹山は、古くから神の宿る神聖な山として信仰を集め、伊吹山の神は、神話の中でも英雄ヤマトタケルを退けた「荒ぶる神」として登場します。

平安時代の初めには、天下の「七高山」のひとつに数えられ、このころ、山に対する原始的な信仰と、9世紀頃に伝わった密教とが結びつき、厳しい修行の場として伊吹山の中腹には、伊吹山寺と呼ばれる山岳寺院があつたことが記録に見えます。「伊吹山寺」は、後に弥高寺(弥高)・太平寺(太平寺)・長尾寺(大久保)・觀音寺(朝日)に分かれ、伊吹山の山岳信仰は、この四ヶ寺と、伊夫岐神社(伊吹)・三之宮神社(上野)を中心に展開します。

永正10年(1513)の弥高寺本堂再建の勧進帳では、天武天皇2年(673)に役行者が開基し、天平神護年間(765~767)に泰澄が再興したと記されています。仁寿年間(851~854)僧三修が「一精舎」を建てたとあり、その後、舎堂が増えて、元慶2年に、国家公認の寺院となり、この頃、お寺の規模・内容ともある程度整備されたと思われます。

徳治3年(1308)の『觀音寺文書』によると、永く弥高・太平両寺の間に本寺・末寺を争う論争があり、ようやくこの年解決したようです。四ヶ寺のうち、この両寺が勢力を誇っていたと思われます。

戦国時代には、京極氏が弥高寺をお城として利用しており、明応4年(1495)とその翌年に京極高氏が弥高寺に陣を敷いています。その後次第に衰退し、現在では山麓の悉地院が唯一法燈を伝えていました。

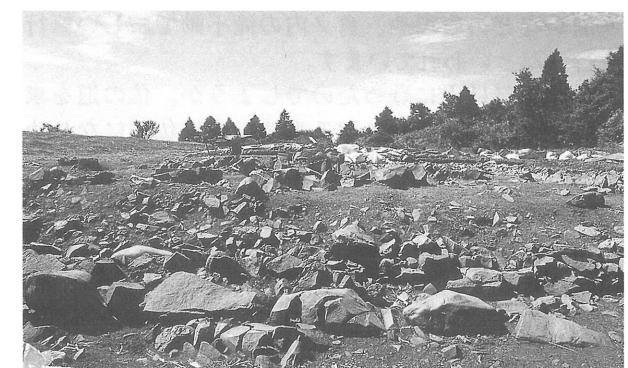
調査の成果

発掘調査の結果、本堂跡の基壇(本堂が建っていた高まり)には、建物の礎石と思われる石を確認しましたが、残り具合が悪くその規模を判断するには至っていません。礎石は直径約90cm前後の大きなもので、かなり大きな本堂があつたことが想像できます。基壇の周囲には石が積まれていたようで、崩

れているものの、一部で石列や石積みが出土しました。山岳寺院の基壇の構造が考古学的に解明された貴重な調査になりました。

出土した土器は、さかづきや明り取りとして使われたと考えられる「かわらけ」、瀬戸や常滑の焼き物(壺・甕・すり鉢・香炉・皿・碗)、白磁や青磁の花瓶・香炉、火鉢、鉄釘、古錢などがあります。土器の年代は、太平寺との本寺末寺を争った時期に当たる12~13世紀(平安末~鎌倉時代)と、京極氏が城として利用した15世紀末(戦国時代)が中心で、この二時期に寺が拡張・改変されたようです。

最も注目されるのが、8世紀(奈良時代)の須恵器が3点出土していることです。弥高寺本堂跡から出土したことが重要で、山岳寺院では日本最古級の事例です。『勧進帳』に記されている泰澄上人の再興のころにあたり、何らかの施設があつたことが考古学的に明らかになりました。(高橋順之)



▲出土した基壇石列



▲調査区全景